

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

早春のころに、私はここで、しばらく仕事をしていたことがある。雨の降る日に、傘もささずに銭湯へ出かけた。銭湯は、すぐ近いのである。途中、雨合羽着た郵便屋さんと、ふと顔を見合せ、

「あ、ちよいと。」郵便屋が、小声を私を呼びとめたのである。

私は、驚かなかつた。何か、私あての郵便が来たのだらうと思つて、にこりともせず、だまつて郵便屋へ手を差し出した。

「いいえ、きようは、郵便来ていません。」そう言つて微笑む郵便屋の鼻の先には、雨のしずくが光っていた。二十二、三の頃の赤い青年である。可愛い顔をしていた。

「あなたは、青木大蔵さん。そうですね。」

「ええ、そうです。」青木大蔵というのは、私の、本来の戸籍名である。

「似ています。」

「A」私は、少し、まごついた。

郵便屋は、にこにこ笑っている。雨に濡れながら二人、路上でむき合つて立つたまま、しばらく黙つている。へんなものだった。

「B」「いやに、なれなれしく、幾分からかうような口調で、そんなこと言い出した。」

「C」

「D」

「E」郵便屋は、もう私が知っていることにきめてしまったらしく、自信たつぷりで首肯する。

私は、なお少し考えて、

「存じませぬね。」

「そうですか。」こんどは郵便屋もまじめに(2)をかしげて、「あなたは、おくには、津軽のほうでしょう?」

とにかく雨にこんなに濡れては、かなわないので、私は、そつと豆腐屋の軒下に難を避けて、

「こちらへいらつしやい。雨が、ひどくなりました。」

「ええ。」と素直に、私と並んで豆腐屋の軒下に雨宿りして、「津軽でしよう?」

「そうです。」自分でも、はつと思つたほど、私は不機嫌な答えかたをしました。片言半句でも、ふるさとのことに触れられると、私は、したたか、しよげるのである。痛いのである。

「それじゃ、たしかだ。」郵便屋は、桃の花の頬に、えくぼを浮べて笑つた。「あなたは、幸吉さんの兄さんです。」

私は、なぜか、どきつとした。いやな気がした。

「へんなことを、おつしやいますね。」

「いいえ、もう、それに違いないのです。」ひとりで、はしやいで、「似ていますよ。幸吉さん、よろこぶだらうなあ。」

つばめのように、ひらと身軽に雨の街路に躍り出て、

「それじゃ、あとでまた。」少し走つて、また振りかえり、「すぐに幸吉さんに知らせてあげますから、ね。」

ひとり豆腐屋の軒下に、置き残され、私は夢みるようであった。白日夢。そんな気がした。ひどくリアリティがない。ばかげた話である。とにかく、銭湯まで一走り。湯槽に、からだを沈ませて、ゆつくり考えてみると、不愉快になつて来た。どうにも、むかむかするのである。私が、おとなしく屋敷をしていて、なんにもしないのに、蜂が一匹、飛んで来て、私の頬を刺して、行つた。そんな

感じだ。まったくの災難である。東京での、いろいろの恐怖を避けて、甲府へこつそりやつて来て、誰にも住所を知らせず、やや、落ちついて少しずつ貧しい仕事をすすめて、このごろ、どうやら仕事の調子も出て来て、ほのかに嬉しく思つていたのに、これはまた、思ひも設けぬ災難である。なんとも知れぬ人物が、ぞろぞろ目前にあらわれて、私に笑いかけ、話しかけ、私はそのお化けたちに包围

され、なんと挨拶のしようもなく、ただうろろしている図は、想像してさえ不愉快である。仕事も何も、あつたものじやない。いい加減に私を掻きまわして、いや、どうも、人ちがいでした、と言つて引きあげて行くにきまつているのだ。内藤幸吉。いくら考えたつて、そんなもの知りやしない。しかも、兄弟だなんて、ばかばかしい。人ちがいであることは、明白だ。いずれ、逢えば、すべての黒白は、つくはずだ。それにしても、私のこの不愉快さは、どうしてくれる。見知らぬ他人から、兄さん、おなつかしゅう、など言われて、ふざけた話だ。いやらしい。なまぬるく、べとべととして、喜劇にもならない。無智である。安っぽい。

がまんできぬ屈辱感にやられて、風呂からあがり、脱衣場の鏡に、自分の顔をうつしてみると、私は、いやな兇悪な顔をしていた。不安でもある。きょうのこの、思わぬできごとのために、私の生涯が、またまた、逆転、てひどい、どん底に落ちるのではないか、と過去の悲惨も思い出され、こんな、降つてわいた難題、たしかに、これは難題である、その笑えない、ばかばかしい限りの難題を持ってあまして、どうとう気持が、けわしくなつてしまつて、宿へかえつてからも、無意味に、書きかけの原稿用紙を、ばりばり破つて、そのうちに、この災難に甘えたい卑劣な根性も、頭をもたげて来て、こんなに不愉快で、仕事なんてできるものか、など申しわけみにに呟いて、押入れから甲州産の白葡萄酒の一升瓶をとり出し、茶吞茶碗で、がぶがぶのんで、酔つて来たので蒲団ひいて寝てしまった。これも、なかなか、ばかな男である。

宿の女中に起された。

「もし、もし、お客さんですよ。」
来たな、とがばと跳ね起き、

「とおしてくれ。」

電燈が、ぼつと、ともつていた。障子が、浅黄色。六時ごろでもあろうか。

私は素早く蒲団をたたみ押入れにつこんで、部屋その辺を片づけて、羽織をひっかけ、羽織紐をむすんで、それから、机の傍にちゃんと坐つて身構えた。異様な緊張であつた。まさか、こんな奇妙な経験は、私としても、一生に二度とは、あるまい。

客は、ひとりであつた。久留米絨を着ていた。女中に通され、黙つて私のまえに坐つて、ていねいな、永いお辞儀をした。私は、せかせかしていた。ろくろく、お辞儀もかえさず、

「ひと違いなんです。お気の毒ですが、ひと違いなんです。ばかばかしいのです。」

「いいえ。」低くそう言つて、お辞儀の姿勢のまま、振り仰いだ顔は、端正である。眼が大きすぎて、少し弱い、異常な感じを与えるけれど、額も、鼻も、唇も、顎も、彫りきさんだように、線が、はつきりしていた。ちつとも、私と似ていやしない。「おつるの子です。お忘れでしょうか。母は、あなたの乳母をしていました。」

はつきり言われて、あ、と思ひあたつた。飛びあがりたいたいほど、きつい激動を受けたのである。

「そうか。そうか。そうですか。」私は、自分ながら、みつともないと思われるほど、大きい声で笑い出した。「これあ、ひどいね。まったく、ひどいね。そうか。ほんとうですか？」他に、言葉はなかつた。

⑥「は、「幸吉も、白い歯を出して、あかるく笑つた。「いつか、お逢ひしたいと思つていました。」

いい青年だ。これは、いい青年だ。私には、ひとめ見て、それがわかるのである。からだがりびれるほどに、いわば、私は、ばんざいであつた。大歓喜。そんな言葉が、あたつてゐる。くるしいほどの、歓喜である。

私は生れ落ちるとすぐ、乳母にあずけられた。理由は、よくわからない。母のからだは、弱かつたからであるうか。乳母の名は、つるといつた。津軽半島の漁村の出である。未だ若いようであつた。夫と子供に相ついで死にわかれ、ひとりであるのを、私の家で見つけて、傭つたのである。この乳母は、終始、私を頑強に支持した。世界で一ばん偉いひとにならなければ、いけないと、そう言つて教えた。つるは、私の教育に専念していた。私が、五歳、六歳になつて、ほかの女中に甘えたりすると、まじめに心配して、あの女中は善い、あの女中は悪い、なぜ善いかというと、なぜ悪いかというと、いちいち私に大人の道徳を、きちんと坐つて教えてくれたのを、私は、未だに忘れずにいる。いろいろの本を読んで聞かせて、片時も、私を手放さなかつた。六歳のころと思う。つるは私を、村の小学校に連れていつて、たしか三年級の教室の、うしろにひとつ空いていた机に坐らせ、授業を受けさせた。読方は、できた。なんでもなく、できた。けれども、算術の時間になつて、私は泣いた。ちつとも、なんにも、できないのである。つるも、残念であつたにちがいない。私は、そのときは、つるに間がわるくて、ことにも大袈裟に泣いたのである。私は、つるを母だと思つていた。ほんとうの母を、ああ、このひとが母なのか、とはじめて知つたのは、それからずっと、あとのことである。

【語注】

*1 ここ … 甲府のこと。

*2 首肯 … うなづくこと。

*3 片言半句 … ちよつともらした言葉。一言。

*4 白日夢 … 非現実的な空想。

*5 一升瓶 … 一・八リツトルの瓶。

*6 羽織 … 着物の一種。長い丈の着物の上にはおるもの。

*7 久留米絨 … 久留米地方から産するもめんのじょうぶな織物。

*8 乳母 … 母に代わつて子に乳を飲ませ、また養育する女。

問一 — ①「可愛い顔」とありますが、「郵便屋さん」が「可愛い顔」をしていることがわかる表現を文中から、一文でぬき出しなさい。

問二 「A」から「E」にあてはまる会話文を、次のア、オからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 内藤幸吉さんを「存じでしょうか？」

イ 幸吉さんを知っていますか。

ウ なんですか。

エ ええ、そうです。

オ 内藤、幸吉、ですか？

問三 (②) に、ふさわしい漢字一字を書き入れなさい。

問四——③「自分でも、はっと思ったほど、私は不機嫌な答えかたをしてしまった」とありますが、それはなぜですか。理由を答えなさい。

問五——④「ゆっくり考えてみると、不愉快になって来た」とありますが、この時の「私」の気持ちの説明として、最もふさわしいものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア わずらわしい東京を離れ、せつかく甲府で少し落ち着いた生活を送り始めたのに、また面倒なことに巻き込まれそうに困惑している。
イ 東京を避け、甲府へこっそりやって来て、誰にも住所を知らせないでいたのに、郵便屋が勝手に情報を流していることに憤っている。
ウ 借金取りに追われる津軽から甲府へ逃げてきたのに、無邪気な顔をして私の身辺を探ろうとする郵便屋の存在に、恐怖を感じている。
エ 忙しい東京から甲府へ来てやっと仕事も波に乗ってきたというのに、奇妙な言動の目立つ郵便屋に振り回され、不気味に思っている。

問六——⑤「これも、なかなか、ばかな男である」とは、誰のことをさしていますか。文中の言葉で答えなさい。

問七——⑥「いい青年だ。これは、いい青年だ。私には、ひとめ見て、それがわかるのである」とありますが、私がそのような気持ちになったのはなぜですか。その理由を文章全体をふまえて説明しなさい。

問八 太宰治の作品でないものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 『走れメロス』 イ 『人間失格』 ウ 『東京八景』 エ 『トロッコ』

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ニューヨークにハヤブサが棲んでいる、ということを読んだのは、たしか宮崎さんの文章の中だった。① びっくりして宮崎さんに確かめると、そのとおりであることがわかった。

ハヤブサといったら奮れ高い猛禽類。荒浪の海にそそり立つ孤島に棲み、人を寄せつけぬ断崖絶壁に巣をつくる。猛禽類としては大きいほうではないが、鋭い精悍な目つき、キュッと曲がった恐ろしいくちばし。これがぼくの抱いていたハヤブサのイメージであった。

そのハヤブサがなんとニューヨークに棲みついている。信じ難いことではないか。(A) 宮崎さんの話を聞き、他にもいろいろ調べてみると、それはぼくの不勉強であることがわかった。ハヤブサがニューヨークに棲みはじめたことは、もうだいぶ前から知られ、話題になっていたのである。

孤島の絶壁に棲む鳥が、なぜニューヨークなどという大都会に棲めるのか？ それはニューヨークが大都会だからである。

ニューヨークにそそり立つ超高層ビルは、荒海にそそり立つ絶海の孤島と同じである。百何十階にも及ぶ高い建物の壁は、まさに断崖絶壁だ。そのてっぺんや途中の階にデザインされた小さなテラス状の装飾は、絶壁にわずかに張り出した岩棚である。

ハヤブサは天然の絶壁の岩棚に巣をかけてひなを育てる。そこはいかなる敵も襲ってこない安全な場所だからである。(B) 襲ってくるすれれば、それは崖づたいではなくて空からやってくる猛禽類だけだろう。けれど、ワシとかタカとかいう他の猛禽類はたいてい原生林に棲んでいるから、そんな海岸の絶壁まではやってこない。人の近づかない僻地には、海鳥をはじめ鳥たちがたくさんいる。ハヤブサはそれらを襲ってえものにする。

何十年の長きにわたって、ハヤブサはこういう生き方をしてきた。そのハヤブサが、どういうきっかけからかわからないけれど、大都会ニューヨークを知った。そこには人工の孤島と断崖絶壁があった。絶壁には子育てに適した安全な岩棚があった。町にはたくさん人のハト(ドバト)がいた。えものには事欠かない。人間はうようよいるが、ハヤブサが飛びまわって生きている空間にはほとんど無関係である。それでハヤブサは増えはじめた。

動物写真家、宮崎さんの写真集『アニマル黙示録』(講談社)には、こういう例がたくさん載っている。こういう例とは、超・人間のものと、超・野生の動物との、ふしぎな「調和」である。

ニューヨークといわず、東京にもいるいるな鳥が増えている。その中にはもともと外国産の鳥もいる。深い山の清溪にしか棲まないとされていたオオサンショウウオが、都会の汚れた水路で流れてくる食べものを待っているという、つげ義春の劇画「山椒魚」もどきの光景も、この写真集にある。

もともとは林のチョウで、人家近くの明るい場所にはあまり姿をあらわさなかったスジグロシロチョウが、今では大都市に棲んでいる。高いビルのおかげで日かげが多くなり、林の中と同じような状況になったからである。

〔3〕^④ 良い演奏とは、聴衆と演奏との間で、音楽の深い交流が行われる時にはじめて生れる。だから、公衆に特定の審美感の質がない時には、その演奏は不完全でしかない。東京の批評家が、世界中の名手の演奏に不満な所以であり、これはトウホウの失格を意味する以外の何ものでもない。

〔4〕だから、公衆の未熟なところからは、良い演奏家は生れ得ないし、未発達な国ほど批評家は、音楽以前のところで、冷たくきびしい。

〔5〕以上を考えれば、個性のない演奏が意味のないこともはっきりする。そうして、現代日本には、本当の意味で個性のある演奏家が出てくるのは、極度に困難であること、また優秀な技術をもった青年たちが、ヨーロッパでかえって、成功することの理由も、明らかになってくる。そこには、演奏家から、個性ある演奏を要求し、引きだす環境、つまり特定の文化の質をもつ公衆がいるのである。

〔6〕東京の市民は、東京の交響楽団を世界各国の交響楽団よりうまいか、まずいかを考えるよりさきに、自分たちの耳が何を求めるかを自覚しなければならぬ。その時日本の演奏家は、ほかの国のそれよりうまかろうとまずかろうと、ほかのどこもちがう特定の個性、つまり質をもった演奏をするようになるだろう。それが最も肝要なことだ。いまのままでは、世界屈指の醜悪な都市の姿と何ら選ぶところがない。

(吉田秀和『荷風を読んで』より)

【語注】

*1 ベートーヴェン … ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(一七七〇〜一八二七年)。ドイツの作曲家。

*2 LP … レコードの一種。一九四八年の発売当初、収録時間がそれまでのレコードより長かったため、「ロングプレイ」の頭文字を取ってLP盤と呼ばれた。

*3 ヴィーン … オーストリアの首都。クラシック音楽が盛んで、音楽の都と呼ばれる。

*4 ドビュッシー … クロード・アシル・ドビュッシー(一八六二〜一九一八年)。フランスの作曲家。

*5 ブルックナー … ヨーゼフ・アントン・ブルックナー(一八二四〜一八九六年)。オーストリアの作曲家。

*6 世界屈指の醜悪な都市の姿 … この評論のこれより前の部分で、筆者は東京について、京都や、海外の諸都市と比べ、いかにも個性のない、雑然とした都市であると述べている。

問一 — AとEのカタカナを、正しい漢字に改めなさい。

問二 — ①「日本の批評家には、それがはっきり見える」とはどういうことですか。四十文字以内で説明しなさい。

問三 — ②「観念の世界」について、

- I その内容を最も具体的に示した表現を、〔2〕段落より二十文字以内でぬき出しなさい。
- II その反対の内容を最も具体的に示した表現を、〔2〕段落より四字でぬき出しなさい。

問四 — ③「この個性的特殊性」とは、審美感の持っている、どのような性質のことですか。三十文字以内で説明しなさい。

問五 — ④「良い演奏」とありますが、筆者の考える良い演奏とは、どのようなものですか。最もふさわしいものを、次のア〜オから選び、記号で答えなさい。

- ア 技術的に優れているだけでなく、西洋での演奏経験の蓄積により磨かれた、演奏家の確固たる美意識を感じさせる演奏。
- イ 作曲家の生まれ育った都市の伝統文化に基づきつつ、聴衆の暮らす都市の伝統文化の要素もうまく取り入れている演奏。
- ウ その曲の主題や、作られた背景を十分に理解している人々に対する、作曲家自身の意図を細部まで忠実に再現した演奏。
- エ 音楽について、自分達の好みをはっきりと持っている人々に対する、彼らの好みを理解し、それに応えようとする演奏。
- オ 演奏家と聴衆の持っている異なる価値観を呼び覚まし、両者を深く結びつけることにより新たな価値観を生み出す演奏。

問六 — ⑤「東京の交響楽団を世界各国の交響楽団よりうまいか、まずいかを考える」とは、現代日本人の、クラシック音楽の演奏に対する、どのような態度をいうのですか。「技術」「精神」という言葉を一回ずつ使って、三十文字以内で説明しなさい。

問五 — ④「したたかである」の文中での意味としてふさわしいものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 命がけである イ ずる賢い ウ わがままである エ 強くしっかりしている

問六 — ⑤「自分たちの生活の基盤」について、ハヤブサにとってニューヨークで生活の基盤になったのはどのようなものですか。五十字以内で説明しなさい。

③ 次の文章は、音楽評論家である筆者が、明治維新以来の日本において西洋がどのような意味を持っていたかを考察した文章の一節です。読んで、あとの問いに答えなさい。

〔1〕一昨年であったか、NHKがイタリアから歌手を招いて、東京でオペラを公演した時、大岡昇平氏が「オペラは外国人に限る。足の短い日本人はやめた方がよい」とかいて、演奏家の憤慨をかったが、大方の愛好家が、いつも外国人のオペラをきいているわけにゆかないから、日本人の上演をきいていることだけは、たしかであろう。技術的にみて、外国の演奏家がすべて優秀なわけではなく、音楽的にみて、同国人がいつも納得のゆく演奏をきかせるわけでもないのだが、逆に日本人の演奏をきいて、なるほど自分の心の琴線にふれた演奏だと感じたことは、私にはまだない。これは、外国の批評家の、私たち日本人の批評に関して、不思議に思うところらしく、「なぜ、日本の批評家は、自分たちがこの作品、この演奏をどう感じたかをかかないで、まるで、その曲の都度、その国の批評家であるかのように書くのか」という疑問をよんだ時、私は考えさせられてしまった。私はかつてそれに答える文章はおろか、カンゼツになり、それを考えたと思われる批評をよんだことがないが、批評家も、作曲家同様、自分の思う通りにかけば、そこにおのずから日本人の性格が出てくるだろうと信じきっているからだろうか。しかし、これは、演奏、作曲、批評の全般に通ずる問題である。日本人としての反応というのは、やはり、深い批評的考察を経てからでなくては、いまは提示されないようなものになっているのだ。根本は外国の模倣であるが、何を模倣するかについての選択に欠けているのが、日本の音楽界の全体であって、それも外国のその基本的性質にせまればせまるほどよいと考えられているにもかかわらず、実際にやっているところは、一晩中かかってベートーヴェンの九曲の交響曲のLPをかける喫茶店に何やらもつもらしい名がついていた如きものである。だから、逆に、日本ほど、先入見なく、外国の音楽を判断できることはないかのような カン を呈する。ポストン、レニングレード、ベルリン、ヴィーン、世界中の一流中の一流と目される名交響楽団も、東京で公演すると、必ず、欠点を指摘される。事実、日本の批評家には、それがはつきり見えるのである。というのも、彼らには、基準が 観念の世界の理想国 にしかないからである。あるいは、もつと実際のな人ならば、あらゆる国のあらゆる名手のうちからよりすぐったLPの演奏がすべての手本なのだ。ヴィーンの公衆は、フランスの管弦楽団の演奏するドビュッシーに感心はするが、心の奥底では、やはり自分たちの管弦楽団の演奏するブルックナーをきいた時のように感激しきれないものを感じる。

〔2〕というのも、音楽の演奏は、技術的な面と精神的な面と二つあるわけだが、演奏は結局その後者の感銘を生むための手段にすぎない。管弦楽団は、それが舞台にならび、美しい音をたてばいいのではない。それは、音楽をするための道具でしかない。そうして、あらゆる文化は、結局、質の問題に キチヤク する。ということとは、そこに集った特定の時代の特定の都会の聴衆が、自分たちのもっている審美感でもって、演奏されたものをうけとり、演奏はその特定の人たちに訴えかけるものでなければならぬ。ステレオ再生器やテレビできいた演奏を基準にして、自分たちの目の前の演奏を判断するという態度は、絶対にまちがいである。というのは、こういう技術文明の進歩によってできたものは、生の演奏よりも歴史的にあとのものだという理由だけではない。今日、ステレオやテレビをもっていれば、まずは、あらゆる国のこれぞという名手の演奏はことごとくきけるようなものだが、その何が名手であり、名演奏であるかを判定する基準は、特定の国の特定の時代に音楽を体験した人々が定めたものだからである。そうして、その人たちの耳は、彼らのそれまでの実演をきいて次第に蓄積された体験の結果によって決定されているのであって、あらゆる国のあらゆる名手を差別なくきいた上できまったものではない。つまり、すべての審美感は、本来、一定の個性をもった体験の結果でなければならぬ。その審美感は、もちろん、体験が殖え、深まることによつて、変化はするだろうし、変るのが当然である。しかし、それには、すでに何かの土台がなければ、変りようもないし、深まりようもない。その土台を、個人なり、その個人の属する集団の審美感の伝統となづけるならば、そういう意味で、芸術の判断は、すべて特殊でなければならぬ。レコードを偏見なくききくらべることからは、この個性的特殊性は得られない。レコードは逆に、生の演奏で習練された耳できく時に、はじめて、よりよく理解され、その リョウヒ がきめられるのだ。これが、私のいう文化の質ということである。それは、高低、深淺、広狭、いろいろとほかの文化と比較できるだろうが、どんなに低く、不完全なものであっても、それはそのものの独自の、一回限りの個性としての質をもつ。そういう質のないものは、文化ではない。

眺めていると、東京の空には意外にたくさん鳥が飛んでいる。カラスやスズメばかりではない。カモメもいるし、ぼくには種類がよくわからない鳥もいる。それらは町や人家に「適応」した都市鳥ではなく、野生の鳥である。そのような鳥が、コンクリートのビルの上を何事もないうように飛び、何の屈託もなく、ビルの一角にとまる。まるで森や林の木の枝にとまるように。

ビルの立ち並ぶ都会は、少しは木々の緑もあるけれど、全体としては灰色であり、緑の森とは景観がまったくちがう。けれど、鳥たちはそんなことを意に介しているとは思えない。(C)、食物はあるし、恐ろしい敵はいないし、天然の森よりずっといいと思っ

ているのかもしれない。禁猟区に指定はされていないが、今では町で鳥を撃つ人はいない。ツバメが人家の軒先に巣をつくるのは、スズメを避けるためだということを明らかにした研究がある。スズメはふだんはあまり人間を恐れないが、ひなを育てるときは人間を避ける。(D)、人がひんぱんに入出入りする店先などには巣をかけない。ツバメはそれを利用する。そういう店先の軒に巣をつくれば、嫌なスズメはやってこない。昔、ツバメがたくさん巣をかけると、店は繁盛するといわれた。話は逆であつて、繁盛している店にツバメが集まってくるのである。

今、大都市にはツバメがめつきり少なくなった。かつてのように、どの通りを歩いていても、子育てのために餌を持ち帰るツバメが飛び交う姿は見られなくなった。おそらくツバメたちは、町そのものの作りや、人間の存在が嫌いになったのではないだろう。町が人工的にきれいになりすぎて、餌にする虫があまりにも減ってしまったので、町ではひなも育てられなくなったから、都会には棲まなくなったのである。

こういう事例を見ると、自然保護とか自然との共生ということについて、少し考え直す必要があるのではないか、という気がしてくる。

多くの動物たちはわれわれが思っていたよりもずっとしたたかである。自分たちの生活の基盤になる条件さえそろっていれば、たとえその条件が人工のものであろうとも、そしてそこをたくさん人間がうるうるしていようと、平気で棲みついてしまう。カラスやツバメのように、人間がいることをむしろ利用しているものだって、けつして少ないとはいえない。都市周辺で急速に増えつつあるタヌキやキツネもその例である。人間がいるおかげで豊富な食物がたやすく手にはいるようになった。命がけで食物を探す必要はなくなったのだ。

けれど、都市化によってツバメは餌を失なった。モンシロチョウは日なたを失なった。そうなら出ていく他はない。

水面に浮いて生活するアメンボは、水が汚かろうと富栄養化していようと一向にかまわない。彼らにとって重要なのは、水の表面張力だけである。たとえ化学的に無害な物質によつても、水の表面張力が低下すれば、彼らは溺れてしまう。

やたらと動物たちに遠慮することはないのかもしれないが、それぞれの動物にとつてのこのキー・ポイントは侵してはならない。

(日高敏隆『春の数え方』より)

【語注】

*1 猛禽類 … タカ目とフクロウ目の鳥の総称。他の鳥類や小動物を捕食する。

*2 テラス … 段丘。狭い棚状の場所。台状の場所。

*3 僻地 … 都会から遠い、へんびな土地。

*4 屈託 … 一つのことになんか気がなつて心配すること。くよくよすること。

問一 ———①「びつくりして」とありますが、ニューヨークにハヤブサが棲んでいることにびつくりしたのはなぜですか。「イメージ」という言葉を必ず使い、五十字以内で説明しなさい。

問二 (A) (D) にあてはまる言葉を、次のア～エからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア むしろ イ しかし ウ もし エ そして

問三 ———②「ふしぎな『調和』」の例として正しいものを、次のア～オから全て選び、記号で答えなさい。

ア 「オオサンショウウオ」と「都会の汚れた水路」

イ 「スジグロシロチョウ」と「人家近くの明るい場所」

ウ 「ツバメ」と「人家の軒先」

エ 「アメンボ」と「化学的に無害な物質」

オ 「ハヤブサ」と「ニューヨーク」

問四 ———③「ツバメがめつきり少なくなった」理由を端的に表す言葉を、漢字三字で文中からぬき出しなさい。